

Hello, Kids!

小学校英語
情報誌

2009
Vol.3-2

特集:どう使う?『英語ノート』—小学校英語Q&A

巻頭言 Just try it! 英語のスイッチをさりげなくONに!
佐久間康之(福島大学教授).....2

どう使う?『英語ノート』—小学校英語Q&A
上原景子(群馬大学教授)
兼重 昇(鳴門教育大学准教授)
新里眞男(東京国際大学教授).....3

実践報告 小中連携を意識した外国語活動の実践
村上和恵(宮城県仙台市立東六番丁小学校教諭).....6

小中学校の英語教育の連携を深めるために
浅野薫史(富山県富山市立芝園中学校教諭).....7

ちょっと一言 白畑知彦(静岡大学教授).....8

Say "Hello" with Alison!
根本アリソン(福島県双葉郡大熊町 外国人英語講師).....8



英語活動を親しめるような環境作りもしています。



東京都日野市立
滝合小学校
郡司 実先生



友だちや先生と積極的にコミュニケーションを図っています。

Just try it! 英語のスイッチをさりげなくONに!

福島大学教授 佐久間 康之



2年後の新学習指導要領の全面実施を控え、「外国語活動」に不安と戸惑いを感じている先生方、心配は無用です。まずは、軽い気持ちで『英語ノート』による英語活動の経験を積んでみましょう。最初から上手くやろうと気張ってしまうと、児童にとっても英語は楽しくなくなります。

1. 使ってみよう『英語ノート』

『英語ノート』は英語活動の1つのモデル教材にすぎません。指導者自身、長所を上手く利用し、必要に応じて創意工夫をすることも忘れないようにしましょう。万人向けの完璧な教材は存在しないのですから、指導者、学習者、時間数その他の環境要因に合わせた授業運営が求められるのは言うまでもないことです。

まずは、『英語ノート』を使い倒してみても、自分自身の使い勝手を見つけることが得策です。移行期のこの時期、年間35時間にも満たない学校の場合、語彙や表現など、指導内容はよくばらず、指導者や学習者にとって親密性(familiarity)のある取り組みやすい項目を厳選して行うことも重要です。あくまで、力まずに英語の音声に親しませることだけで十分なのです。

2. 言語=文化

一見、無味乾燥に思われる単純な語である「数字」や「色」ですが、これらに対するイメージは日本と英語圏では異なります。また、応援や励ましの表現である日本流の「一生懸命頑張って!」(Work very hard!)の使用場面において、英語圏では“Take it easy!(気

楽にやりなさい)”を用います。「頑張らなければならない」と意識している本人に対して、さらに追い打ちをかけるような表現は使わないとの考えがあります。言語表現にはその根底に言語圏の文化的背景があるのです。

3. 英語のスイッチをさりげなくONにする環境作り—単純接触効果

私たちはふだん、ある情報にくり返し接すると、無意識にその情報への好感度を増すことがあります。例えば、テレビのCMで新製品をくり返し見ていると、買い物の際に自然にその商品に対して無意識に好意的に反応してしまいます。これが「単純接触効果」です。

英語活動も、授業以外で自然に英語のスイッチをON(無意識に親しませる)にすることで英語を取り込ませる(intake)活動の強化を行う環境作りが必要なのです。具体策としては、誰もが目にする場所に英語の掲示物を貼り、定期的に替えたり、月ごとに別の英語の歌を歌ったりすることなどが挙げられます。これらは、無意識的に刺激がくり返し提示される潜在学習です。その効果は(中学校で求める英語の学力とは異なり)非常に緩やかなものかもしれませんが、しかしながら、筆者が関係した山間部の小学校で、この種の効果は児童英検(BRONZE)などにおいても発揮されています。

まずは、よくばらずに、身近にできることから英語活動を始めましょう!

どう使う?『英語ノート』—小学校英語Q&A



「総合的な学習の時間」での国際理解教育は、ALTの先生から英語をシャワーのように浴びて、とても楽しい活動ができたと思います。『英語ノート』を使うようになって、他の教科のように教科書で学習するような感じになり、「英語嫌い」の児童が出始めていると聞いたことがあります。「英語嫌い」にさせないために、どのような工夫をすればよいですか?

A 学習指導要領解説では、外国語活動新設の趣旨の1つとして、教育の機会均等の確保と中学校への円滑な接続等の観点から、共通に指導する内容を示す必要性があるとしています。これは、「総合的な学習の時間」などでの英語活動の取り組みには学校間で相当のばらつきがあるためです。『英語ノート』は、こうした状況下で「共通の教材」として準備されたものですが、そのため万人の口に合うように用意されているので、学級の実態を踏まえた味付けが必要です。例えば、子どもたちが興味・関心を持っているものを足す、難しすぎる場合は時間を少し余分に当てるか部分的に変える、補足的な教材や教具を作って活用するなどです。教科書で勉強するようになってしまう原因として考えられるのは、例えば、『英語ノート』のページに固執しすぎたり、ゲームやクイズ的な活動が単なる競争や出来・不出来に終始しがちになったりして、活動が英語を用いたコミュニケーションを図る体験に向かっていないことではないでしょうか。つまり、『英語ノート』は、どの活動も「そこにあるからやっていく」という機械的な使用でなく、「立体的に活用することをお勧めします。そのためには、「今日の活動の目標は～だから、そして子どもたちは～だから、『英語ノート』をこう使おう」という視点が大切です。「英語嫌い」の原因には様々なことが考えられますが、そのうち、「わからない」ことは大きな原因です。周りで話されていない外国語に慣れ親しむためには、音声に慣れて聞こえるまでくり返し聞くことが必要です。『英語ノート』の各レッスンは、数種類の聞く活動を経て話す(伝え合う)活動へと発展する構成となっていますが、十分に聞き取れず、理解できないうちに話すことを求めるのは避けるべきです。聞き取れるようになるまで、意味のある内容を目的を持たせてくり返して聞かせることを大切にしていきたいです。



(群馬大学教授 上原 景子)

A 「英語嫌い」を作らないためには、まず、児童をよく知ることで、児童が考える「好き」「楽しい」「嫌い」などの原因を探ることが肝要です。いわゆるお勉強となっていることが「嫌い」の原因であれば、授業のありかたについて考える必要があるでしょうし、「楽しさ」の源がわかればそれを強調していくことも可能でしょう。

ここで、問いに挙げられている、『英語ノート』は、もちろん教科書という位置づけではありませんが、先生方が授業を作っていく際の参考資料としての役割は大きいと思います。しかし、他教科の教科書と同じく「『英語ノート』を教える」のではなく、「児童や学校、地域に応じて『英語ノート』を使いながら授業を作る」という基本理念を忘れてはなりません。いかに『英語ノート』と子どもたちの距離を埋めてあげるかを工夫していただきたいと思います。『英語ノート』に示されているテーマを参考にしながら、子どもたちの言いたい気持ち、表現したい気持ちを大切にすることが「英語嫌い」に対応することになります。教師が用意した教材をいかに効率的に「覚えさせる」、「理解させる」のかを考えるのではなく、学習指導要領で示されている、「コミュニケーションの場面」「コミュニケーションの機能」に基づいた活動(『英語ノート』はその一例と解釈できます)を工夫し、体験を通して、子どもたちがことばや文化について新しいことに気づききっかけを与えること、子どもたちからわき上がる気持ちを大切に、それを適切に評価(フィードバック、ことばがけ)することが授業として必要不可欠です。いわゆる「子ども中心の外国語活動」を作ることです。『英語ノート』を参考にしながら、我々教員の得意分野を活かしつつ、児童が「これは英語でなんて言うのかな」「こんなことも言いたいな」と考えられるような場の設定や「へえ～」と思わせるような教材の工夫をしたいものです。



(鳴門教育大学准教授 兼重 昇)

Q

学級担任が主体的に外国語活動を行うようにとされていますが、発音に自信がありませんし、クラスルームイングリッシュを頑張っただけとしても、すべて英語で授業をするのはとても無理だと思います。少し複雑な活動の説明をするのは日本語で行いたいのですが、もし、日本語が混じると児童に悪影響が出ないでしょうか？上手に使い分ける方法はありますか？

A このご質問は多くの先生方がお聞きになりたいことですね。理想は全部英語で授業かもしれませんが、そう簡単ではありませんね。結論的には、英語活動では学級担任が「必要に応じて」日本語を用いることは差し支えないですし、時にはかえって大切かもしれません。ただし、この「必要に応じて」がどういうことを考える必要があります。

原点に戻り、小学校学習指導要領解説 外国語活動編を見てみると、外国語活動の「目標」の3つの柱は、①「言語や文化について体験的に理解を深めること」、②「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ること」、③「外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること」ですが、これらはすべて「外国語を通じて」行うこととされています。そこで、「授業を全部英語で？」という質問が生じるわけですね。『解説』では、大切なこととして、例えば「児童が使える外国語を駆使し、様々な相手と互いの思いを伝え合い、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体験すること」など、体験的活動を通して具体的に気づかせることがくり返し強調されています。このことから、英語活動では「子どもたちが体験したり気づいたりできる機会を活動中にたっぷり設定すること」と「そのために、活動の仕方は全員が何をすればよいかわかるよう明確にすること」の2つが前提となります。活動の説明が複雑でわからないような状況や英語で説明しているためにわからないという状況は避けるべきです。英語でも日本語でも教師にとって複雑なものは、子どもたちにはもっと複雑です。原則として、指導内容に設定した表現や慣れている表現は英語で、複雑な活動方法の説明などには明確にする努力と図・ジェスチャー・日本語も交えるなどの工夫が必要です。また、活動の仕方のモデルをALTと一緒に見せることは特に有効な手段なので、可能なかぎり行うことをお勧めします。



(群馬大学教授 上原 景子)

A 先生方の中には、英語が苦手な方もいるでしょうね。それでも、学習指導要領では「指導計画の作成や授業の実施については、学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行う」となっていて、学級担任には多くのことが求められています。気持ちを切り替えて、児童と一緒に学ぶという積極的な姿勢に立っていただきたいですね。

まず、「少しずつ」という考え方です。はじめから多くのクラスルーム英語を使おうとすると、教師にも児童にも無理があります。「今日はこの表現を使ってみるぞ」というように、毎時間少しずつ増やしていくことで十分だと思います。ただし、教師は児童と違って、自分が授業の中で使おうとする英語はあらかじめわかっているはずですから、ALTやCDなどのモデルを活用して、しっかり言えるようにしましょう。

次に、「ここは英語で」という考え方です。つまり、授業をすべて英語で行う必要はありません。英語の構造や複雑な活動についての説明を英語で行うのは、かえって児童を混乱させます。英語を使う場面をあらかじめ選択しておくべきでしょう。特に、英語を使ってみて、わからない様子だったら日本語に変えてみるというやり方を続けると、児童は英語の方を聞かなくなります。私自身は、内容によっては日本語で説明してからほぼ同じことを英語で説明するという方法をよくとります。この方が英語に耳を傾けてくれるようです。

最後は、「やはり練習を」です。私は小学校の教師の発音はいい加減でよいとは思いません。コミュニケーションができなかったり、誤解をされるようでは困ります。ポイントを押さえて少しずつ練習すれば必ずよくなります。学年単位、学校単位で日常的な練習の機会が持てるとういことです。しかし、安心してください。日本人風の発音でも、ほとんどの場合大丈夫です。児童は教師には自分たちと一緒に努力する姿を見るのであって、発音から悪い影響はあまりないと思います。



(東京国際大学教授 新里 眞男)

Q

小学校の外国語活動と中学校英語の円滑な接続をふまえた「小中連携」という言葉をよく聞きます。児童が進学する中学校にとって、出身の小学校によって行ってきた外国語活動がバラバラだったら困るのはわかります。でも具体的にどのように小中連携を図ればよいですか？小学校で必ず養っておきたいことや注意しなければならないことを教えてください。

A 「小中連携」のためには、単に人事交流をすればよいというものではありません。まず関係者による現状の情報共有が最低限必要です。小学校教員の中には「中学校の英語授業は入試対策に終始している」とか、中学校教員では「小学校は楽しいばかりで、いいとこどりで力をつけてない」といった現状や理念に関する誤った認識や思いこみがある場合がよく見られます。お互いの授業や学校を見ることから始める必要があります。これは「交流」の段階と言えるでしょう。そしてその際、小中ではなく、少なくとも中学校区内での小学校同士の交流も積極的に進めていく必要があります。しかし、実際には自治体により「小学校英語教育研究会」が未設置、設置されていても「教科外部会(2部会)」であり、優先的に活動を進めにくいという地域もあります。多忙を極める教員の状況を考えると、この点は行政の努力が不可欠でしょう。情報共有・オリジナル教材の共有により、小学校間の進度や学習内容のバラツキが解消されますし、中学校英語でも小学校で利用した教材の活用などスパイラルで有効な学習を保証することができます。『英語ノート』を中学校でのディクテーションや文字学習のための教材として活用することもできます。

他国の実状を見ても同様ですが、幼小中高大といった異なる学校種での連携を図るのは困難なことが多いのは事実です。それぞれの学校は、いわゆる独自の「学校文化」を有しているとも言われています。有意義な情報の共有によって、それぞれの学校の専門家が自らのフィールドで最大限に授業を改善していくことが連携を進めていくうえで、大切な一歩ではないでしょうか。最終的には「人と人との関わり」が最も重要な要素となります。今回の「コミュニケーションを中心とした教育改革」には、教員同士のコミュニケーションの促進と、それが可能な環境整備も期待されます。



(鳴門教育大学准教授 兼重 昇)

A 「連携」のためには、関係する組織の両方に情報提供や交流などを通して相互理解のための努力が求められます。しかし、英語教育における小中連携の場合、生徒を受け入れる中学校側がもっと小学校での英語活動の実態を知る必要があるでしょう。小学校側としては、小学校の英語活動で何を指し、どのような指導を具体的にしているかを中学校側に伝えることが大切になります。

しかし、教育や授業の実態を相互に伝え合うことは難しいですね。やはり、定期的な情報交換会や相互授業参観などの交流が必要になります。県や市によっては、中学校の英語教師を中心に3年間程の小中人事交流をしているところもあります。やはり「連携」のためには校長や教育委員会などの積極的な関わりが欠かせません。

さて、「小学校で必ず養っておくべきこと、注意すべきこと」ですが、その最低基準は小学校学習指導要領に書かれています。その内容がやはり「連携」の前提でしょう。小中の先生方が集い、学習指導要領を輪読し、その考え方や具体化について共通理解を得るとよいと思います。

私としては、「連携」のための共通項として、児童のコミュニケーション能力をどのように伸ばすかという観点を重視してほしいと思います。小学校では、児童の発達段階における特性から、歌、ゲーム、簡単なやりとりなどが活動の中心になります。それに加えて、自分の好きなこと、やりたいこと、気持ち、簡単な意見を伝え合うようなコミュニケーション活動をぜひ取り入れてほしいと思います。授業のどこかで、「今まで触れてきた英語表現を使うと自分の気持ちなどを表現できるんだ」という実感を児童に与えてほしいのです。コミュニケーション能力へのこのような実感こそが、中学校、いや高校の英語教育にもつながっていく、基本的な連携の土台だと思っています。



(東京国際大学教授 新里 眞男)

小中連携を意識した外国語活動の実践



宮城県仙台市立東六番丁小学校教諭 村上 和恵

1. はじめに

昨年、「中学校の英語も楽しいよ」と卒業生が小学校に遊びに来て話してくれました。その時、中学校の英語学習について興味が湧きました。

前任校で英語活動を担当してきましたが、中学校の英語科の内容についてさほど意識することはありませんでした。平成23年度から、外国語(英語)活動が5、6年生で完全必修化されます。この卒業生のように、小学校で英語活動を体験した児童が、中学校で、より英語学習に意欲的に学ぶことができるようになるための取り組みを、考えることが求められています。

昨年度までの実践をもとに、小学校から中学校へつなぐために必要な要点について述べていきます。

2. 自校における英語に親しむ素地作り

まずは、小学校で、外国語(英語)に親しむ素地をしっかりと作っておくことが必要だと考えています。

昨年度は1年生から4年生までは従来通りの英語活動、5、6年生は『英語ノート』の試作版を活用して各学年5～6時間ずつの活動を行いました。一番の基本は「聞く」「話す」活動で、子どもの実態に応じた学習内容を計画することです。計40時間分の指導案と教材作成に時間はかかりましたが、子どもたちが英語に親しむことができる、充実した活動を行うことができました。

3. 中学校区内の他の小学校との情報交換

昨年度、教育センターで行われた外国語活動研究協議会で、小学校同士で小グループを作り、情報交換の時間を設定していただきました。年間の活動時数や内容、ALTとの連絡調整方法、現在の課題などについて情報交換をしました。各学校の相違点が明確になり、とても参考になりました。視点を決めて、情報交換をする機会の必要性を改めて感じました。このような情報交換が、中学校区内の小学

校同士で行うことができれば、中学校の英語学習への橋渡しがよりスムーズにいくものと考えます。

4. 中学校との連携

ALTとの打ち合せ(日程確認、活動内容の相談)をするために、中学校に行った際、英語科の先生に通訳をしていただきました。

打ち合せを通して、連携を図るうえで大切なことは2点あると考えました。①ALTとの打ち合せには中学校の先生にも同席していただき、互いの情報を得る機会にすること、②ねらいにもとづいた活動計画や自作教材を具体的に提示すること、です。

現在、小学校、中学校の担当の先生は、互いに情報を得たい状況にあります。指導の目標や内容、実際の指導法や使用している教材について情報交換が必要になってきます。視点を決めて直接話す機会を作っていくことで具体的な連携を図ることができると考えます。

また、6年生の最後の学習において、中学校からALTの先生をお呼びして、中学校の英語科を意識した授業をしてもらう実践もあります。ぜひ取り組みたい活動です。

5. 最後に

今年度、5、6年生では年間35時間、英語活動を行う予定の学校もあるわけですが、時数が増えたことで、ALTとの打ち合せの持ち方、教材の見直し、地域人材の活用など、新たな課題がたくさんあります。移行期間は、実践の中で課題を解決する方策を探る期間だととらえています。

小学校での英語活動を充実させながら、子どもたちが中学校でも楽しく学び続けることができるように、先生同士、小学校同士、そして中学校とも連携していきたいと考えています。

小中学校の英語教育の連携を深めるために ～その実践と今後の課題～



富山県富山市立芝園中学校教諭 浅野 薫史

1. はじめに

富山市立芝園小・中学校では、平成16年度から中学校との連携を図りながら、小学校英語活動カリキュラムの検討を進めてきた。平成20年4月には、同一敷地内に小・中学校が合築されて開校したことを受け、「小中一貫的連携教育」の1つとして、小学校英語活動に中学校英語科の教員が積極的に関わりながら、小中の連携研修を深めているところである。

2. 小中学校の連携の試み

(1) 小学校英語活動のカリキュラム見直し作業

昨年度まで英語活動支援講師が、実際の指導にあたる担任の先生との連絡を密にとりながら、コーディネーター役として、児童の発達段階や実態に合わせ、きめ細かな指導計画を立案し、授業を展開してきた。平成23年度からの小学校外国語(英語)活動の本格実施を控え、今年度は、今まで取り組んできた内容や年間指導計画を、『英語ノート』の内容とのすり合わせを行い、見直しを進めている。

(2) 小学校英語活動への中学校教員の参加

昨年度から、小学校の授業の参観だけでなく、中学校教員が実際に指導に参加している。小学校英語科の年間指導計画に、中学校の教育課程との連携部分を明記し、指導内容を協議して決めている。中学校との接続を意識し、授業への参加は、主に6年生を対象としている。

小学校で実際にどのようなことに取り組んでいるのかを把握するとともに、中学校での指導にその活動を生かすための工夫を相談し、小中学校それぞれにおいて授業の工夫や見直しにつなげている。

3. 今後の課題

小学校外国語活動では、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、音声を中心とした外国語に慣れ親しむ活動から、言語や文化、生活への関心・理解を深めること」が主眼であり、スキルを身に付けることを目標とはしていない。その一方で、英語活動で育まれた興味・関心から、「もっと学びたい、知りたい」という思いをもち、多くのスキルを身に付けてきている児童も見られる。中学校入学の段階で、生徒の個人差が大きく、対応しづらくなってきていると感じることもある。小学校までの経験は、一人ひとりが違って当然である。小学校で育まれた英語への興味・関心を、どのように教科としての学習へと高めていけばよいか、実際の言語運用能力をどのように高めていけばよいか、小中学校における英語学習のギャップを縮め、より円滑な接続を図る工夫をしていかなければならないと考えている。

もし小学校の先生方をお願いできるのであれば、「英語を好きにしてほしい」ということである。かつての生徒が中学校に入学して初めて英語に触れたときの感動を、今、小学校英語活動で経験できることは、子どもにとっても、先生方にとっても、嫉妬してしまうほどにうらやましいものである。英語を使ってコミュニケーションをとる楽しみを経験させることができる時間だからこそ、子どもたちとともにことん楽しんで取り組んでほしいと思う。

そのために、少しでも多く小中学校の授業を互いに参観し、指導のヒントを得るとともに、指導について話し合う機会を多くもつことが大切である。それぞれのよさから学び合う姿勢こそ、小学校英語活動と中学校英語科の指導をより充実したものにすることができると思われる。

第2回「英語を話せ」って言うけれど…

「ある言語が話せる」ということは、その言語を「そこそこ習得している」ということです。たいていの小学校の先生は、英語を習得されていませんから、いきなり「授業で英語を話さない」と言われても、話せるはずがありません。一週間くらい詰め込み勉強したぐらいでは外国語を話せるようにはなりませんね。それは無理です。もしそのようなことを要求する人がいるならば、その人は言語習得のことを何も知らない人です。

しかし、です。今英語ができないからと言って、すぐにあきらめてしまうのは早計というものです。それは、外国語学習は何歳になってからでもできるからです。今からでも勉強すれば、当面の必要性に絶対に対処できるようになります。また、外国語がわかるようになると、純粋にとっても楽しいのです。そこに新しい自分が見えてくるからです。新しい世界も広がるからです。私はそういう経験をしました。

もし、英語コンプレックスがおありで、「英語を話さなくては」と暗い気持ちになられているのであれば、少々考え方を考えてみませんか？ つまり、「今回の外国語活動はちょうどよいチャンスだから、子どもたちと一緒にもう一度勉強してみよう!」という前向きな姿勢に気持ちを切り替えてみてはいかがでしょうか？ 音声教材もどんどん利用するとよいでしょう。前向きに楽しく取り組む方が教師生活も有意義だということです。

英語を使用してすぐに授業を構成できるようになるなどとは考えないで、1年、2年のスパンで取り組むとよいと思います。一歩一歩です。ことばが通じることとはとても楽しいことですし、そのような楽しさを子どもたちと共有したいですね。

白畑 知彦(静岡大学教授)

Say “Hello” with Alison!



根本 アリソン

イギリス出身・1989年より福島県で英語講師として活躍中

■School Life in England (2)

今回はイギリスの小学校の様子と学校行事を紹介します。皆さんがイギリスの小学校を見て、まず驚かれるのは校舎でしょう。ほとんどの学校は、広い芝生の校庭に囲まれた、赤いレンガ造りで平屋建ての建物です。児童用玄関はいくつもあり、外から直接自分たちの教室に入ることができます。雨が多い国なので、外遊び用のアスファルトスペースも必ずあります。子どもたちは休み時間中、そこで鬼ごっこや縄跳びなどで遊んだり、芝生でサッカーをしたりします。

イギリスにも1年間を通して、いろいろな楽しい行事があります。1学期(Autumn Term)には、9月の十五夜に合わせて、果物や野菜、保存食品や缶詰などを学校に持ち寄る感謝祭“Harvest Festival”があります。全校集会で感謝の気持ちを表した歌などを歌い、一人暮らしのお年寄りや恵まれない人々に、集まった食料品を配ります。

12月初めには、色鮮やかなクリスマスカードや、かわいい手作りのプレゼントが買えるPTA主催のバザー“Christmas Fair”があります。また12月中旬には、親や親戚を呼んで、劇や歌を披露する発表会“Nativity Plays”があり、イエス・キリストの誕生(クリスマスの起源)を演じます。この時期にはどこの小学校でも同じ劇が見られます。

最後に紹介するのは、学年最後の楽しい思い出となる、3学期(Summer Term)のメインイベント、6月の“Sports Day”です。チーム対抗で、青い芝生の上で白いラインの間を走ったり、おもしろい道具を使った競技をしたりします。次回はイギリスの小学生の1日を紹介합니다。

See you next time!

(福島県双葉郡大熊町 外国人英語講師)